パナマ

Panama

2003年に世界文化遺産に登録されたパナマシティの旧市街。その中心にあるカテドラルの2本の塔が見える。

昔日の残照

**南北のアメリカ大陸を結ぶ中米地峡の東端にあるパナマ共和国。
また大西洋と太平洋に面した地理的重要性から、
16世紀のスペインの到達以来、海運の中継地として発展してきた。
首都パナマシティの旧市街をはじめ植民地時代の遺構が多く、
旅人は熱帯の光の下に往時の繁栄ぶりに思いを馳せる。**

写真＝柳生雄弐　文＝高梨好夫

ラム酒はスペイン語でロン。甘い香りの中で旧市街の夜が更けていく。

バルボア通りに残るイエス・キリスト教会跡。18世紀半ばに建てられたが火災と地震でこのように。

サン・ホセ教会の祭壇。燦然と黄金色に。

首都パナマシティ 旧市街に流れるスペインの風

太平洋に面した首都パナマシティ。古くから交通の要衝として繁栄してきた政治、経済の中心だ。現在は中米の金融センターとして知られ、新市街には高層ビルが林立している。

パナマの大西洋岸にスペイン人が到来したのは1501年、翌年にはコロンブスも探索している。11年後には太平洋岸に足を踏み入れ、ここにスペイン人が町をつくったのは1519年のこと。以後、南米探検の拠点となり、インカ帝国を滅ぼしたピサロもここから出港している。また金や銀を本国へ運ぶ集積地として繁栄した。その町パナマ・ビエホは1671年、敵対していたイギリスの海賊モーガンにより略奪、破壊された。今では教会や住居跡の壁の一部が残るのみ。

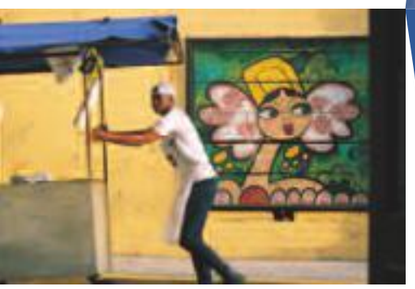
2年後、スペインは近くの小さな半島にあるカスコ・ビエホ地区に町の機能を移した。その旧市街が、歴史地区としてパナマ・ビエホの遺跡とともに世界遺産に登録されている。

オフィスビルが立ち並ぶ新市街から旧市街に入るとその違いは歴然。道は細く、ほとんどが一方通行。歩道の幅も狭い。目に入る高い建物は教会の塔ぐらい。小さな広場の前から旧市街のメインストリート、ア通りを東へ歩いた。バルコニーが付いたパステルカラーの建物が並んでいる。スペイン風のコロニアル様式の家並。淡い青や黄色の壁は、塗って間もないように鮮やか。強い光を跳ね返してまぶしいほど。

右手に教会があった。黄金の祭壇で知られるサン・ホセ教会。中に入ると正面の祭壇が輝いている。絢爛豪華そのもの。パナマ・ビエホが略奪にあったとき、祭壇を漆喰で覆い隠し、免れたという逸話が残る。しかしこの黄金も南米ペルーから奪い取ったものといわれる。

教会の先を左に折れると独立広場があった。ここが旧市街の中心。左右に塔をもつカテドラルはシンボル的な存在。政庁舎、近くには大統領官邸も。

海に沿った道を行くとフランス広場。フランス大使館があるのでそう呼ばれる。そこにオベリスクが立っていた。運河記念碑。階段を上ると遊歩道がのびていた。そこからは遠くに高層ビルが建ち並ぶ新市街。歩いてきた旧市街、そして新市街。パナマシティがもつふたつの貌を目の当たりにできた。



上／街角には先住民族を描いた壁画が。下／パナマハットはお土産屋には必ずある。よい旅の思い出に。

右から／船が牽引されて閘室に入ると水が抜かれ、前方の閘室、海へ。すべてがゆっくり進むが、目が離せないショーだ。

巨大な船が沈んでいく パナマ運河の壮大なショー

パナマといえば運河。全長80㌔、閘門システムを備えたパナマ運河は、太平洋と大西洋のカリブ海を結ぶ海の大動脈だ。船が閘門を通過する様子の一部始終を見学できるビジターセンターがある。パナマシティからほんの数㌔、さっそく展望台に上がった。運河に面した柵の前には二重、三重の人垣ができていた。目の下は水門がいくつも並んだミラフローレス閘門。運河を見るとカリブ海側から大きな船がゆっくりと入ってきた。四角い箱が高く積み上げられている。コンテナ船だ。

中米地峡のなかでも特に狭いパナマ地峡に運河をつくる計画はスペイン植民地時代からあった。当時、ペルーなど南米の太平洋側から集めた金や銀は、パナマシティに陸揚げされ、陸路と水路でカリブ海側の港に運ばれ、そこから本国に送られた。1855年、両大洋を結ぶ全長77㌔のパナマ鉄道が開通、物資や人の輸送量は飛躍的に増えた。

運河の建設はスエズ運河を手がけたフランス人レセップスにより1880年からはじまったが資金難などで頓挫。代わってアメリカ合衆国が工事に着手、10年の歳月をかけて1914年に完成した。船は南米大陸の南端を経由せずに両大洋を行き来できるようになった。

コンテナ船の姿が大きくなってきた。前後左右にワイヤーがつながれ、牽引されてゆっくりと進んでくる。船と運河の壁の間は1㍍もない。ぎりぎりだ。水門の間の閘室に入ると水が抜かれ、船が沈んでいき、船腹が岸壁に隠れた。前方の閘室と同じ水位になると水門が開き、船が進む。ここではこれを二度繰り返して海へでていく。このような閘門が太平洋側に2か所、カリブ海側に1か所ある。運河でいちばん高い部分は海抜27㍍。閘門は水の階段ともよばれる。

閘門の先に船の上部が見え、ゆっくりと動いている。運河の拡張工事で一昨年に完成した新しい水路を行く船。新しい閘門ができて航行できる船の大きさは幅32・3㍍から49㍍に、長さ294㍍から366㍍になった。1999年末に運河と両岸の領土がアメリカから返還された。

貨物船が太平洋に出ていった。船は目的地に向け、青い大海原を駆けていくことだろう。

カリブ海へ向けて運河を航行。出口のコロンはパナマ第二の都市で世界有数の自由貿易港。

標高1000mにあるボケテ。人口は24000。さわやかな気候に恵まれ、リゾート地としても人気。

上／ボケテで栽培がはじまったのは19世紀後半。下／高級品種のゲイシャ種の香りと味を楽しむ。

地球好日

高原の町ボケテ 農園でコーヒーツアー

パナマシティから国内線で東へ1時間余りでダビの空港。さらに車で標高1000㍍にあるボケテを目指す。途中左手に険しい山が雲に見え隠れしている。標高3475㍍、パナマ最高峰のバルー火山だ。町の入り口にコーヒーショップがあり、2階はコーヒーの博物館。ボケテはパナマにおけるコーヒー豆の主産地だ。ここにあるコーヒー農園を見学しにやってきた。

バルー火山の山麓の渓谷に沿って長くのびるボケテの町。コーヒーショップの看板をいくつも目にした。家並みが途切れると山道。熱帯雨林の森の中を走る。勾配のきついカーブがつづきやがて道路脇にコーヒー畑を目にするように。舗装道路を外れると目指すメリダ農園。ここでガイドツアーに参加した。

まずはコーヒー畑を見る。農園は150㌶。畑は山の斜面に広がっている。急斜面だ。すでに実の収穫期は終わっているが、上り下りするのは大変だろう。収穫は地元の先住民族の人たちに依頼しているという。良質のコーヒーを栽培するには気候や地理的条件がある。ここは標高が高く涼しく、土も火山灰性でミネラルが豊富で水はけがよく栽培に適している。ここで栽培しているのは60㌶がアラビカ種の一種のゲイシャ種。1930年にエチオピアで発見された地名に由来する。豆の粒は大きいが収穫量が少なく、高級品として知られている。

畑から工場内に移り製造過程を見学しテイスティング。ゲイシャ種の豆を異なる方法で乾燥、ローストした味の違いを楽しむ。3つのカップに挽いた粉を入れ、香りの違いを確かめ、それに湯を注ぎ、味を比べる。確かに微妙な違いがあり、どれも花の香り、果実の味わいを感じた。

この農園はホテルも経営している。昼食はレストランのテラス席で。緑あふれる景観を楽しんでいると、目の前の木にハチドリがやってきて、細長いくちばしで花の蜜を吸っていた。

上／ボケテはコーヒーとともに栄えてきた。下／メリダ農園のコーヒーショップの看板。

上／標高1700mに広がるメリダ農園のコーヒー畑。下草を刈るなど、手入れを怠らない。

下／町の手前にあったコーヒーショップ。コーヒーのかぐわしい香りに誘われる。

チャグレス国立公園に先住民族の集落を訪ねる

翌日、ボケテからパナマシティに戻り、北へ車で向かった。1時間半ほどでチャグレス国立公園。ここにある先住民族の村を訪れる。車を降りると川に細長いボートが待っていた。乗り込んで川面を行く。舳先に立つのは腰巻一枚のエンベラ族の若者。現在、パナマには7つの先住民族が暮らしている。その数は全人口400万の6%と推定されている。スペイン人の侵略以前には部族は79あったといわれ、伝染病や奴隷労働などで数が激減した歴史がある。

両岸は密林。野鳥の鳴き声が川面を渡ってくる。木の上にはサルの姿も。細い水路に入り、それを抜けると水面が広がっていた。水草の葉の上を小鳥が歩いている。やがて行く手に草ぶきの家が見えてきた。エンベラ族の村だ。

桟橋に上がると傍らで男たちが斧を振るって小さなボートをつくっている。すぐに20人ほどの村人が集まってきた。子どももいる。その一人一人と握手。大きな草ぶき屋根の下に案内されると村のリーダーが挨拶と村の生活の様子を話してくれた。

ここには35家族、87人が暮らしている。エンベラ族は隣接するコロンビアとの国境近くに多く住み、自給自足に近い生活を送っている。ここでは農耕や漁業に制限があり、彼らは観光客を受け入れ、昔から伝わる自分たちの文化を紹介している。得た収入は教育や医療などに役立てている。今の生活を大事にしたいが、伝統文化を守っていくことと便利な生活を送ることとのバランスをとるのが難しい。

村の中を案内してもらった。観光客用のトイレは水洗。遊具が置かれた小さな広場、学校では子どもたちが授業中だ。草の上を鶏が走り回っている。病気やけがに効くと伝わる薬草の紹介も。部族に伝わる音楽と踊りを観賞して村をあとにした。その際も握手。自然と寄り添って暮らす村人のフレンドリーな笑顔が印象的だった。

学校の先生は一人。様子を見ていると子どもたちが手を振ってきた。

上／成人は男も女もタトゥーを入れている。染料は木の樹液。2週間ほどで消える。上左／リーダーのノコーさん。英語で話してくれた。リーダーは5年ごとに選ばれる。左／村はのどかな空気に包まれていた。カゴや彫刻など質の高い民芸品の売店もある。下／太い角材から斧でボートを削りだしていく。

家は高床式で屋根は円錐形の草ぶき。この村ではすべてこの形。

右／人口5000の小さな町。ボブ・マーリーのシャツも並んでいた。左／町の人たちが日陰で談笑。

地球好日

コロンブスゆかりの ポルトベーロ 広がるカリブ海の青

チャグレス国立公園を出てさらに北へ。やがて左手に青い海が見えてきた。カリブ海だ。パナマシティからおよそ100㌔。地峡を横断したことになる。車を止めたのは港町ポルトベーロ。イタリア語で美しい港という意味。名付けたのは4回目の航海でここに停泊したコロンブス。1502年のことだ。

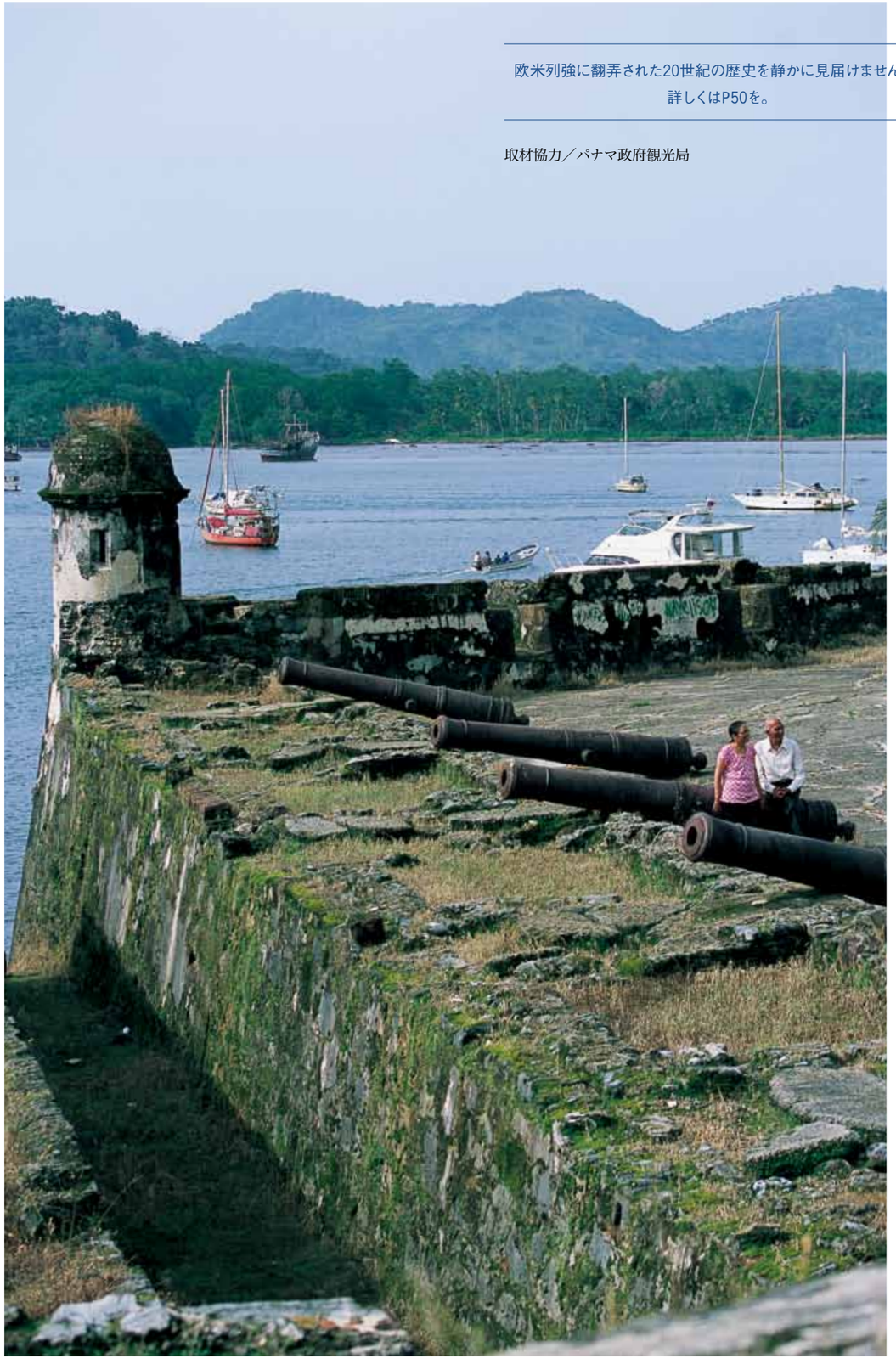
海際に着くと無骨な光景が迫ってきた。サン・ヘロニモ要塞だ。南米から集めた財宝はパナマシティからここに運ばれ、スペイン本国に送られた。その重要性から、スペインは16世紀末から湾の入り口と奥に5つもの要塞を築いた。ここもそのひとつ。約60㌔離れたサン・ロレンソ要塞を含め「パナマのカリブ海沿岸の要塞群」として世界遺産に登録されている。

サン・ヘロニモ要塞。奥に税関だった博物館が見える。

中に入ると、まず目に着いたのは大砲の列。20近くも並んでいる。砲口はどれも湾の入り口に向けられている。当時は税関や倉庫が置かれ、町は大いに栄えた。主要な港と町を守る強固に見える要塞だが、1668年にイギリスの海賊に襲われ、略奪された歴史を持つ。仕掛けたのは3年後にパナマシティのパナマ・ビエホを略奪、破壊したモーガンの配下。さらに18世紀にはイギリスの艦隊に襲われ占領されることになる。

サン・ヘロニモ要塞は湾の最奥にある。入り口にあるサンティアゴ要塞に向かった。門をくぐると、ここにも大砲が並んでいる。崩れた建物の跡があり、18世紀の破壊の程度を想像させられる。のちにスペインは小さな港での交易に切り替え、また南米大陸を周りこむ航路を模索、ポルトベーロは衰退していく。要塞の石積みを見ると石灰岩。珊瑚の形がはっきりわかる石もある。その黒ずんだ石がこの港町の歴史を物語っているよう。

湾内にはヨットやボートが浮かんでいる。海を眺めていると、この国がたどってきた道に思いがいく。すべてはカリブ海に到達したスペイン人からはじまった。地峡にあるがために強国の関心をひき、長い植民地時代を過ごした。同時にパナマ運河という賜物も。青い海にパナマの歴史が映しだされた。



湾の入り口を守ったサンティアゴ要塞。荒廃した姿が長い歳月を感じさせる。

欧米列強に翻弄された20世紀の歴史を静かに見届けませんか。
詳しくはP50を。

取材協力／パナマ政府観光局